



魔女のお料理

芳田尚哉

ことごとぐつぐつ。

素敵な音と少し甘い香りに、小さな女の子の黄金色の耳がぴくぴくと反応しました。

「おなかすいたあ。いいにおい」

とてとてと、香りに導かれていきます。

そこでは、とんがり帽子をかぶった女の子が、フリフリの可愛いエプロンをして、木の棒で大きな壺の中身をかき混ぜていました。

どこか絵本に登場しそうな魔女のようですが、壺の中身はどうやら怪しいものではなく、いい香りがしています。ある意味では魅惑の魔法薬かもしれません。

「うわあ、おいしそうなシチュー」

小さな女の子は、ひょこっと壺をのぞき込みます。まだまだ煮込む必要がありますが、すでにとってもおいしそうです。

「こら、危ないでしょ」

女の子は優しく注意します。

「ごめんなちい」

ぺろりと舌を出しますが、どうにも反省しているようには見えません。女の子はため息をつきつつ、しょうがないなと諦めます。

「そうだ。お手伝いをお願いしようかしら」

このままだと、ずっとのぞき込んでいそうなので、お手伝いをしてもらうことにしました。これなら大丈夫。

「向こうにキノコがあるから、きれいに洗ってちょうだい」

女の子は食材の山を指して言います。

「うん、わかった」

お手伝いを頼まれたことが嬉しいのか、小さな女の子は耳をぴくぴくさせながら、おそろいのエプロンを付けると、食材の山からキノコを選びます。

「このかわいいのと、この大きいのと、こっちのころころしたのと……」

楽しそうにキノコを選んでいる姿を見ていると、自然と笑みがこぼれます。

キノコを選び終わると、よいしょと踏み台に乗って、ボウルに水をためます。

すぐにたまると、その中にキノコを入れて泳がせます。

「ちゅぷちゅぷちゅぷ♪ ちゅぷちゅぷちゅぷ♪」

楽しそうに歌いながら、ぐるぐるとキノコを泳がせています。

その楽しそうな様子を見ながら、女の子は小さな鍋に水を入れて火にかけます。

「できたあ。きれいになったよ」

しばらく泳がせて満足したようです。その頃には、鍋の水がぐつぐつと沸いていました。

「じゃあ、今度はこっちね」

女の子はキノコを鍋に入れます。

「お風呂みたいだね」

「そうね、お風呂だね」

そうしていると、シチューもいい具合になってきました。

「お皿を準備してちょうだい」

そう言うと、小さな女の子は元気に返事をして準備します。

女の子は、用意してくれたお皿にパンをのせ、湯がいたキノコは調味料でさっと味付けして小鉢へ。メインディッシュのぐつぐつ煮込んだシチューお椀に入れます。

「わあい」

お手伝いをして、お腹がぺこぺこになっていました。

きゅうと可愛いお腹の音を鳴らしながら、小さな女の子は料理を運んでいきます。

「猫舌なんだから、ちゃんとふうふうしなきゃだめよ」

「はあい」

魔女のお料理

<http://p.booklog.jp/book/118002>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118002>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

S p e c i a l T h a n k s

もかろーる 様

(https://twitter.com/mokarooru_0x0)